

## 津軽

桜の頃の弘前公園は日本一と作家の田山花袋に絶賛された津軽は、梅に桃、桜に林檎、すももが一度に咲く季節を迎えている。生物季節観測によれば桜の開花のすぐ前の二二日にはタンポポが咲き、二月前に先発した梅の開花前線が届き、ひと月まえ本州南岸に上陸した桜の開花前線がはじめ1日三〇<sup>キロメートル</sup>の速さで北上していたのが、津軽付近では一七<sup>キロメートル</sup>と緯度が上がるほど速度を落しながらも追いついて梅に桜となる。

この頃にウグイスの初鳴きにモンシロチョウやツバメの初見が集中して、ウメにウグイス、桜にツバメと春の爆発模様がぎゅーつとつつまつた閉塞前線の様相をていして北国を 一気に駆け上がった。

冬を耐え忍んだ生き物が跳躍するように爆発した春の縞模様は北上する。頂に雪を抱き深い谷筋には残雪が山裾に走る秀峰、岩木山が津軽の野に爆発した花の春を前景に悠然と座っている。暖冬に続く暖かい春で咲き始めた桜に寒の戻りで吹雪が舞っているだろうか。

津軽平野の金木町の旧家で生まれた作家、太宰治は 或るとしの春、私は生まれ初めて本州の北端、津軽半島を凡そ三週間ほどかけて一周した、……」ではじまる名作『津軽』を書いた。 岩木山が、満目の水田の尽きるところに、ふわりと浮かんでいる。実際、軽く浮かんでいる感じなのである。したたるほどの真蒼で、富士山よりもっと女らしく、

十二単衣の裾を、銀杏の葉をさかさに立てたようにぱらりとひらいて左右の均斉も正しく、静かに青空に浮かんでいる。決して高い山ではないが、けれども、なかなか透きとおる位に嬋娟 せけんたる美女である」と描いた。

故郷に限りない郷愁を感じながらも旧家に生まれた宿命と呪縛から逃れた太宰治が、自らの運命を凝視して故郷を訪れ回想し、自分の育った風土歴史、故郷の忘れえぬ人々と交歓した。

故郷に送る言葉を求められ返答に曰く「故郷は汝を愛し、汝を憎む」と吐露した。それが『津軽』である。その本を片手に今の日本人が忘れた「旅」をして、今の日本人に見えない日本をみていたイギリス人、アラン・ブーースが四四年後の同じ五月、太宰を追って旅して『津軽』に失われゆく風景を探して『』を足で書いた。日本に二〇年も住んでいる彼の切り口は鋭い。すでに逝った二人の二冊の『津軽』を抱えて津軽の春を限りなく味わながら、ゆつくりと旅したいものである。

(村松 照男)